

国立大学協会教育・研究委員会との意見について

日 時：平成21年7月14日(火) 16:00～16:55

場 所：学術総合センター内会議室

出席者：国立大学協会 一井香川大学長(教育・研究委員会委員長)、濱口名古屋大学長(教育小委員会委員長)、佐藤室蘭工業大学長(研究小委員会委員長)、池田茨城大学長、梶谷電気通信大学長、浅原広島大学長、長澤帯広畜産大学長、寺尾浜松医科大学長、他
内閣府 奥村議員、大江田審議官、有松参事官

国立大学協会出席者からの主な意見：

「審議経過」については、大変ありがたい内容。これまで大学と企業とで責任のなすりあいをしてきたが、そのような時期は過ぎている。補助金などによるプログラムを作ってから支援することは止めて、自主的な行動に対して支援をしてほしい。

博士・修士は立場違う。内容が混在しているので整理すべきである。イノベーションを生み出すような突出した人材か幅広い人材かどちらを育成していくのか。自立性を求めているのに、インターンシップなどはやられていないのではないか。企業が各々の博士論文をどのように評価しているのか。博士論文の中に、本人の独自性や能力が表れているのではないか。

理解できる内容である。博士はこれまでアカデミアが中心であったが。技術者育成はこれからの取り組み。大学の努力だけではできないことは、キャリアをつんだ学生の社会での評価であり、学位を取得して社会で評価されているのか。大学が楽しいから行くというモチベーションしかない。大学の力だけでは何ともならないので、社会全体で何とかしてほしい。

幅広い深みのある人材が必要だが、日本は深みのある人材だけの育成をして、幅の広い人材育成を行ってこなかったことは十分に認識している。今後は、幅の広い人材育成も充実させたい。企業も資格を取得したら評価するなどの処遇をきちんと考えてほしい。学生も博士を修了したらアカデミ

アではなく、社会で活躍してほしい。幅の広さの概念が曖昧である。
今の学生は、マニュアルをほしがる指示待ち人間になっている。体系的なカリキュラムで学んだ学生と自立的な学生とは違うのではないか。
単位の見える化、カリキュラムの体系化は、より受身な態度を助長し、単なる教養人を育てることにはならないか。変化への対応力、自立、問題解決力を備えた人間を育てるには、カオスの中に放り込むしかないのではないか。大学院でいえば論文指導を通じて養うものではないか。既成概念にとらわれたらイノベータに発展しないのではないか。
意欲的な学生が少なく受け身であり、また、現代は情報量（学習量）が多すぎることから、学生は要点のみを覚えて試験に臨むという対応を取る。そのような状況でコースワークを増やした場合、どのような結果になるか。むしろつまみ食いが増えて、体系的な知識を身に付けるという本来の目的を達成できないのではないか。求めている人材と構想がずれているのではないのか。
学士と修士の6年一貫のコースを作ろうとしたが、制度的にできなかった。今回のテーマは「大学院における」となっているが、6年一貫や9年一貫の考えがあっても良いのではないか。
今は、修士中心の教育体制であるので、6年一貫のプログラムを作りたい。修士の基礎学力をつけるのに1年間かけるのはもったいない。いわゆるT型人間の入試、成績評価は、知識だけでは評価が弱いのではないか。面接が良いと思うが、面接力も弱いので、評価の方法が課題である。